

6月



あの日のあの川 リレー日記 ～第68話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどの川でどんなことをした記憶がありますか？ 幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第68話主人公 玉置千紘

(筑波大学大学院 システム情報学研究科 構造エネルギー工学専攻 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(■川ガール・□川系男子)

(出身地を流れる川：東京都呑川)

「車窓からの景色」

いつのこと？： 大学2年

どこの川？： 千曲川(長野県)

白川研究室の玉置と申します。今回は、私が川や水資源に興味をもつようになったきっかけとなる思い出について、拙文ではありますがお話しさせていただきたいと思います。

私の実家の近くには、呑川という二級河川が流れています。付近の学校の校歌には必ずと言っていいほど登場する呑川ですが、正直私にとってそれほど思い出のある、親しみのある川ではありませんでした。というのも、川沿いには柵があり、川の水は道の高さよりずっと下の方を流れており、遊ぶことも、土手で過ごすこともなかったからです。川の近くには住んでいました

が、川にそれほど興味を持たないまま大学生になってしまいました。

大学に入ってから、都市計画に興味を持ち学んでいました。しかし学びを進めるうちに、都市をマクロ的に見る都市計画と自分の興味に少しずつギャップを感じるようになりました。しかし何に興味があるのか明確にわからないまま、2年生になってしまいました。そんな2年生の夏に、川に興味をもつきっかけとなる出会いがありました。

2年生の夏、講義の課題のために糸魚川市に行くことになった私は、東京駅から北陸新幹線に乗りました。特にやることもなく、窓際の席だったのでなんとなく車窓から外の景色を眺めていました。曇り空の東京の景色を見ていると眠くなってきて、出発してすぐに寝てしまいました。目を覚ますと、新幹線はちょうど長野県の上田のあたりを走っていました。長野は明るく晴れていて、思わず外を見た瞬間、私は、岩の間にキラキラと光る千曲川の水面に恍惚として見入ってしまいました。川はこんなにも美しいのかと純粋に感動し、川を過ぎてからもしばらく動けずにいました。それほど何かに感動したのは初めてでした。

その千曲川との出会いをきっかけに、散歩中にもよく川や池の水面を観察するようになりました。その時ほどの衝撃はないものの、水を見ていると心が動かされ、気持ちが澄んでいくような気がして、事あるごとに川や入り江、池などを見に行くようになりました。すると今まで建築物や公園ばかりを見てきた都市の中に、想像していたよりもずっと多くの水辺空間があることに気づきました。そして、自分はマクロな都市計画よりも都市の構成要素としての水に興味があるのかもしれないと思い、白川研究室に入りました。

研究室配属をきっかけに足を踏み入れた「川の世界」は、私が思っていたよりもずっと奥が深いものでした。川に関するシンポジウムやイベントに参加し、川を愛する方々のお話を伺ううちに、自分の身の回りの河川についても興味湧いてきて、呑川について改めて調べてみました。するとあまり気にも留めていなかった呑川で、こまめな河床清掃やスカム対策など水質浄化のためにあらゆる努力がなされていること、呑川の生態系を守るために日々活動している方々がいることがわかりました。当たり前のように流れている川は、沢山の人の努力によって守られているのだと痛感し、川を見る視点がまた1つ増えました。

川は人類の歴史と密接にかかわっており、川に関する研究分野は非常に多岐にわたっていて、勉強していて飽きることはありません。これからも様々な川を見て、楽しみながら学びを深めていきたいと思います。

(次は丸山達也さんにバトンを託します)